

# としょかんだより第79号

## 美福門院の納骨(1)

平安時代末期鳥羽上皇の後であった美福門院が死後、高野(菩提心院)に納骨されたことはよく知られている。夫である鳥羽上皇の意思(ともに京都洛南の地、安樂壽院の新塔に葬りたい)に反して、門院は遺書で納骨の場所を高野に定めた。四十四歳であった。多くの史書にそのあたりの事情が書かれているが、ここでは藤原俊成のいえの(ゆう)家集(個人の歌集)『長秋詠藻』を引いてみる。



高野山  
六角経蔵

故女院も月の廿三日かくれさせ給ひてのち、御遺誡にて、御舍利をば高野の御山になむおさめたてまつりを、しはすの四日にや、かの御山につかせ給ひし日、雪のいみじうふり朝に、侍従大納言入道成通けふ御山につかせ給ふらむ事などせうそくありし返事のついでに、つかはしけるをくれるて思ひやるこそかなしけれたかの、やまのけふのみゆきを(三九一)

これによると、永暦元年(一一六一)十一月二十三日、崩御。同年十二月四日に高野に納骨したということである。また、納骨の場に藤原成通がいたこともわかる。時に高野は雪がひどく降っていたようで、なにか印象深い思いを懐いた俊成は、生きながらえた老齢のわが身と対峙して、若くして世を去った門院をしのいで、右のような和歌を詠んだ。女人の罪障がこの真っ白な雪によってすべて消え去ることを願ったのだろうと思われる。

歴史物語『今鏡』によれば、姉との約束を果たして、門院の弟藤原時道が舍利を首にかけて高野に登山したことが記されている。そして藤原隆信も付き添ったことも書かれている。一時威勢をほこった門院であったが、死後は寂しい有様であった。中山忠親の日記『山槐記』(永暦元年十一月廿四日)によれば、葬送の時も参列者が少なかったことがわかる。門院の子ども近衛天皇がはやくこの世を去り、その後、後白河が即位するが、その際の経緯と後白河を退位させ二条帝が即位させたた経緯が関連しているのかよくわからないが、後白河上皇への配慮であろうか、当時の貴族の「変わり身」のはやさには驚かされる。しかし、成通と若い隆信が納骨に加わったのは、門院へのあつい感謝の念であったであろうと思われる。

いま筆を擱こうとしているが、研究室の窓のそとでははげしく雪が降っている。いつの世でも雪の高野は人の心を千々に乱れさせるのであろうか。

2014年2月開館予定表

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	

2014年3月開館予定表

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

	9:00-21:30		13:00-21:30
	9:00-17:00		休館日

発行所

〒648-0280

和歌山県伊都郡

高野町高野山 385

高野山大学図書館

閲覧室

TEL:0736-56-3835

FAX:0736-56-5590

E-mail

service-lib@koyasan-u.ac.jp

第5回戸田文化講座

「文化財保護行政と世界遺産  
-史跡・遺跡を中心として-」

十二月十三日(金)本館三階三〇八号教室に  
おきまして池田一城先生(高野町教育委員会  
文化財担当)による文化講座が開催されました。  
当日は、本学学生をはじめ高野町からの一般参  
加者を含め多くの参加者がありました。



第6回戸田文化講座

「西行の「あはれ」-高野山で詠んだ和歌を中心に-」



一月十五日(水) 本館三階三〇七号教  
室におきまして講師は下西 忠先生(高野  
大学図書館長)による本年度最後の文化講  
座が開催されました。

一般の方のご参加もあり、大変興味深い  
講座となりました。

平成25年度第3回

図書館茶話会 -図書館長を囲んで-

一月十七日(金)本学裏千家茶道部主催による図書館  
茶話会が開催されました。

本学図書館閲覧室にいらっしゃった  
方々にお茶と、茶菓子が振る舞われ  
ました。



後藤田さん

亀位さん

木下部長